

2025年2月28日（金）

老球の細道855号

2月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

学生の時に流行した歌手アダモの「雪が降る♪」に歌われる雪の情景は寂しくもロマンチックだった。画家グランマ・モーゼスの描く雪の風景は困難と共に喜びも表現されている。今月の大雪は版画家斎藤清の「会津の冬」の再現。まさに雪の重厚感と人々の試練である。

2月「グチるな、ケチるな、ビビるな」をスローガンに掲げたが大雪でトーンダウン。天災、不幸、恋、そして選手の成長はある日突然。日々雪かき、汗かきで体力向上に努めた。

1・読書から

◆「弱った、困った、参ったと生涯言わない」〈『高い目 低い手』：小島孝治著：アポロン企画〉：言葉は「言霊」、「人は言ったようになっていく」と言われる。トステイン氏も「疲れた」という言葉は絶対言わなかった。バレー、バスケの名将は同じことを言う。

◆「マホメットは“汝らのなかでもっとも弱い者の足並みについていけ”と言われた」〈『人類の知的遺産イブン・ハルドーン』講談社〉：チームは強い者ばかりではない。弱い、未熟な選手をどう扱うか。元バレーボール日本代表監督小島孝治氏も言う「勝てる選手を作ることより、下手な選手を人並みのプレイができるようにすることに主眼を置く」と。

◆「今日の結果は明日へのプロセスであり、今日ダメだったことは未来への糧になります」〈スポーツジャパン〉；ミニバス大会で力を出せなかった孫よ、へこんではいけない。常に輝かしい未来に視点を置き、日々チャレンジしてほしい。チャレンジとは失敗すること。

2・新聞から

◆「大成する選手と、しない選手の違いは何か。エッセンスはおよそ二つに集約される。それは“思いの強さ”と、“切れ目のない努力”だ」〈朝日：プロとは何か〉：プロ野球 DeNA の創業者南部オーナーが新人選手達に伝えたメッセージである。どんな世界でも超一流になるには「努力の継続」。努力は才能を凌駕する。

◆「今年も世界で、悲しい、つらい出来事は、きっとまた起きる。でも、伝えなくてはならない。記憶をつないでいくことで、自分が、誰かがそこから学び、世界がより良い方向に変わっていくように」〈朝日：特派員メモ〉：バスケットボールの歴史も私たち爺様が伝えていかなければならない。爺様は歴史、伝説、エピソードを伝えていくのが最後の仕事である。

◆「撮影現場は、大変さを楽しんだもの勝ち。人間というものは“大変なことをやる快感”の中で生きているんだなあとと思う。嫌々でもやっとくことがないと、幸せを感じられない」〈朝日：語る：泉谷しげる〉：今こそ「大変なこと」から遠ざかってはいけない。大変なことをやり遂げた後に達成感があり美味しいお酒も飲める。そして人間的に「大きく変われる」。

◆「古いこと、昔から知られたこと、誰でも見て見落としてきたことをはじめて発見されたように見るということ」〈朝日：折々のことば：ニーチェ〉：真に独創的な頭脳を持つ人の特徴だという。高校の漢文で習った「温故知新」。バスケットのドリル創案にも役立っている。